

〔茶湯の人と造形展によせて〕

小倉色紙の木板雲母刷料紙をめぐって

松平定信は寛政改革において、好色本や幕政を風刺する出版物を規制しましたが、一方では、当時の高度に発達した木板印刷の技術を応用して、『集古十種』のような文化財の図録を編集しています。『集古十種』は全八十五冊に及ぶ大型の冊子本あり、序文には寛政十二年(1800)の年紀があります。内容は書名の通りに、碑銘、鐘銘、兵器、銅器、楽器、文房、印章、扇額、肖像、古書画の十種類に分けられ、ほぼ原寸に写されています。このような『集古十種』の編集には、江戸幕府の文化財に対する考え方がうかがえます。その古書画部に一冊だけ「法帖」があります。本来、「法帖」とは、中国の書籍に用いられる言葉です。書の手本や鑑賞のために、筆蹟を写して石に刻み、摺りだした折本を意味します。著名な「法帖」では、北宋時代に太宗の勅命によって編集された「淳化閣帖」が上げられます。数ある書の名品から、『集古十種』の「法帖」には「小倉色紙」が選ばれており、武家において、「小倉色紙」が高く評価されていたことが分かります。

大和文華館の所蔵する『集古十種』では、第二十三冊が「小倉色紙」の冊子です。黄色の顔料で花唐草文様を刷った表紙に、赤色の紙に「集古十種 法帖 定家卿真蹟小倉色紙」と墨で刷った題簽を貼っています。掲載された「小倉色紙」は三十三枚であり、右上に所蔵者が記されています。尾張、紀伊、水戸の徳川御三家をはじめ、前田家、伊達家、井伊家など、十一枚を武家が所蔵しています。破れ

や虫食いの損傷、反古紙が料紙に用いられる場合は、背面の墨書まで写されており、木版の下絵は作品を手元に置いて透き写したと思われる。精度の高い木板印刷ですが、それだけに、各色紙の書体の相違は明らかです。奥書には、次の様に編集方針を記しています。「この色紙はその家々の重宝にしてなかく／伝えしものなれはもとより優劣の／論にも及はすまいて億見の取捨すへき／事にもあらずたゝ温故のたよりになす／むとてうるにしたかひて収入するのみ」(／は本文の改行を示す)。優劣や真贋を問題にするのではなく、ただ家々の家宝を記録するために、調査した順に掲載したということです。それぞれの色紙の相違を認めた上で、作品を忠実に記録しようとする姿勢がうかがえます。

「小倉色紙」では、鑑賞や鑑識において料紙の装飾が重視されます。この冊子では、料紙装飾が書の墨とは異なる淡い墨で印刷されています。書と同様に、『集古十種』に掲載された小倉色紙では、料紙装飾も一様ではありません。何の装飾もない素紙、素紙や染紙を切り継いだ料紙、金銀の切箔や砂子で装飾した料紙、木版で図様を刷り出した料紙などさまざまです。『集古十種』が編集された当時、これらの多様な料紙装飾は、「小倉色紙」の定家流の書と関係が深いと考えられていたことがわかります。

木版で図様を刷り出す料紙には、唐紙、すなわち、木版雲母刷と思われれる料紙が二枚含まれています。一枚は「尾張家蔵」の「順徳院」

の和歌を書写した小倉色紙「もしきや」です(図1)。現在、この色紙は徳川美術館に所蔵され、料紙には故粉地に雲母で大振りの唐草模様を刷り出されています(図2)。作品と『集古十種』の掲載図を比較すると、かなり正確に写されていることがわかります。もう一枚は所蔵者を「隠士貴良蔵」と記し、小野小町の和歌を書写した小倉色紙「花の色は」です。ただ、この色紙では、既に雲母が剥落していたようで、図様が不明瞭になっています。『集古十種』の掲載作品の他にも、蟬丸の和歌を記す小倉色紙「これやこの」(東京国立博物館蔵)のように、木板雲母刷料紙が用いられた「小倉色紙」があります。

興味深い作品には、左京大夫頭輔の和歌を書写した小倉色紙「秋風に」(図3)が上げられます。この作品は明治四十三年(1910)十二月五日に京都美術倶楽部で開催された下村正太郎氏御所蔵品第二回入札に出品され、同売立目録の作品番号1561に掲載されています。下村正太郎は大丸屋下村家宗家の第五代から第十一代の世襲名であり、当時は正剛氏が十一代正太郎を継いでいました。この作品では、藤の図様の木板雲母刷料紙が用いられています。しかし、この図様は桃山時代の後期に、角倉素庵や本阿弥光悦らの町衆によって出版されたと考えられている古活字本にも認められます。現在、このような古活字本は嵯峨本、光悦本と呼ばれています。奥書に慶長十年(1605)八月の年紀がある書写本、「謠本大原御幸」(国立能楽堂蔵・図4)に、同じ藤の図様の木板雲母刷料紙が見られます。

紀貫之の和歌を書写した小倉色紙「人はいさ」(図5)にも古活字本と共通する木板雲母刷料紙が用

いられています。この作品は大正三年十一月十六日、京都美術倶楽部(御池寺町東入)で行われた能久治氏所蔵品入札に出品され、同売立目録の作品番号2番に掲載されています。ただし、縦の寸法が六寸四分、横の寸法が五寸五分と縦長であることや、四行書の最後の行が短くなる字配りは、一般的な小倉色紙とは異なり、元来、冊子本の一枚であった可能性があります。売立目録には、冷泉三位と古筆了音の極書が付属していたと記載されています。木板雲母刷料紙の図様は雌日芝です。古活字本では、本来、この図様は蝶と組み合わされた蝶雌日芝の図様であり、この作品では、雌日芝だけが刷り出されています。蝶雌日芝の図様は、書写本の「観世流謠本藍染川」(大和文華館蔵・図6)に認められます。この作品には、観世左近太夫であった身愛による奥書があり、慶長十一年に親愛が後藤庄三郎に贈った五十番組の謠本の一帖とわかります。後藤庄三郎は代々、江戸幕府の御金改役を勤めた豪商です。『集古十種』にも、後藤庄三郎が所蔵していた伊勢大輔の和歌を書写する小倉色紙「いにしへの」が掲載されています。

この二枚の小倉色紙は、料紙の木版雲母刷装飾から考えれば、古活字本、すなわち、光悦本、嵯峨本と同時代に書写された可能性があります。定家様の書を臨書する際に、小倉色紙にふさわしい料紙として、当時、復興された木版雲母刷を施した料紙を用いたとすれば、この二枚の小倉色紙は本阿弥光悦をはじめ、当時、活躍していた能筆家に、定家流の書が熱心に学ばれたことを示しています。(中部義隆)
※図2は『定家様』五島美術館、1987年より、図3は『墨』59号、1986年より複写しました。

図1

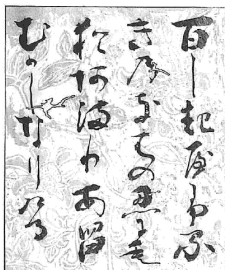


図2



図3

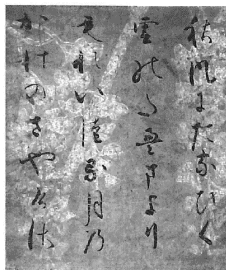


図4



図5

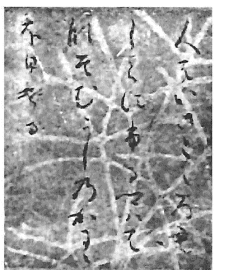
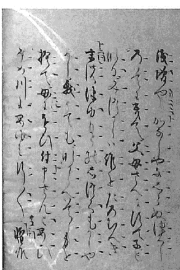


図6



季刊 美のたより No.188

平成26年10月31日

発行 大和文華館